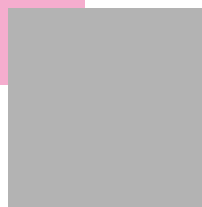
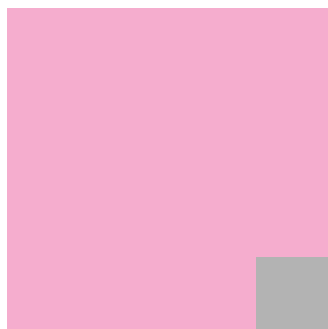


第1章

簿記の目的



第1節

簿記の目的

1 簿記の目的

人間の生活は、狩猟の時代から物々交換の時代となり、そして貨幣経済の時代に至ったが、こうなると衣食住の欲求を満たすためには、まず金銭を得なければならなくなった。

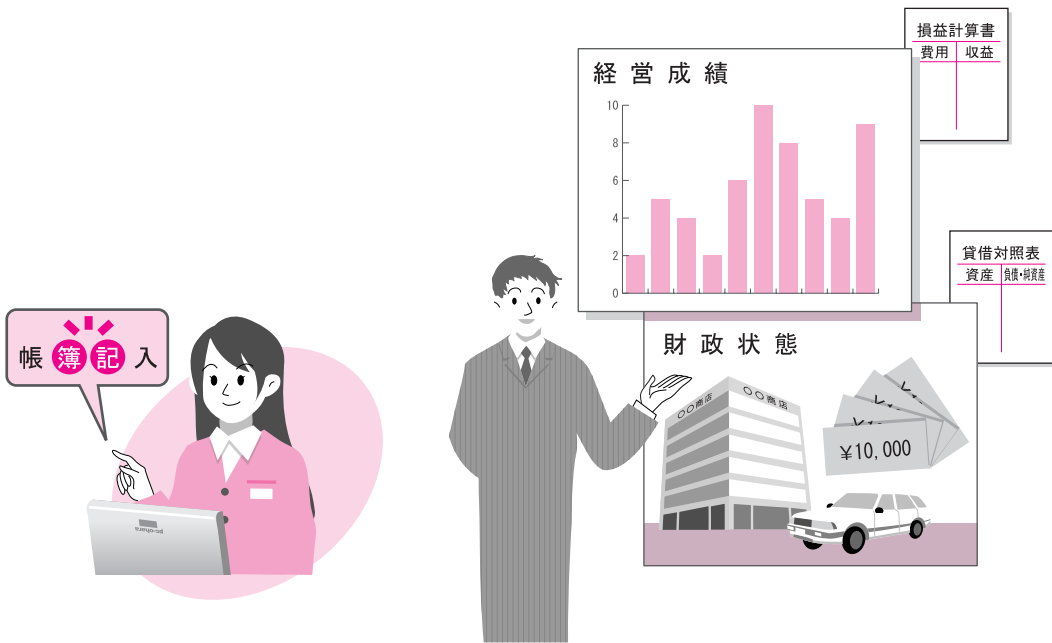
貨幣経済の社会では、種々の財産を所有し、現金の収入、支出が行われるようになったが、初期のころは所有する財産が少なく、また現金の収入および支出も少ないので、記憶しておくだけで十分であった。

しかし、多くの財産を所有し、また現金の収入および支出も頻繁に行われるようになると、記録の力を借りなければならなくなった。

商人は、金銭を得るために自分の持っている財産を運用して活動しているが、企業の維持、発展をはかるには、過去の経営活動を反省するとともに、将来のための資料を用意しなければならない。そこで、現在の財産の運用状態を明細に記録し、それに基づいて一定期間の経営成績と一定期日の財政状態を明らかにする必要性が生じた。

〈簿記の目的〉

- ① 一定期間の経営成績を明らかにする。
- ② 一定期日の財政状態を明らかにする。

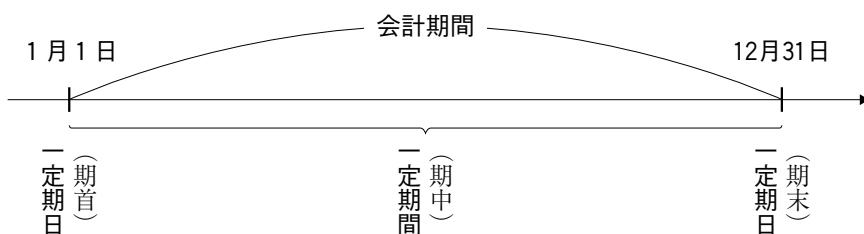


2 会計期間

簿記の目的は、一定期間の経営成績や一定期日の財政状態を明らかにすることである。しかし、経営成績や財政状態の計算の基礎となる期間や期日がいまいでは有用な資料を得られず、簿記の目的を達成することはできない。そこで一定の期間を定めて計算するが、簿記ではこの一定期間を会計期間とよんでいる。

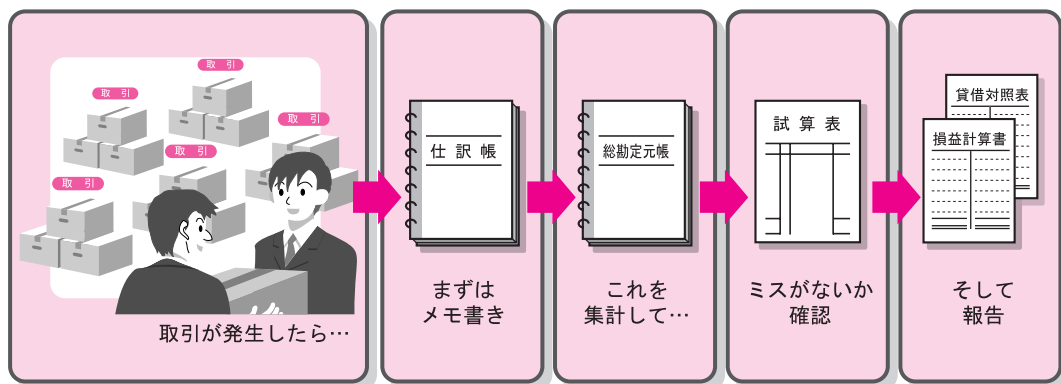
3級商業簿記では、特に個人商店を前提として学習する。個人商店では、所得税が1月1日から12月31日までの1カ年を基礎に課せられるため、この一定期間も暦年による1カ年とする。

また、会社の場合には会計期間を半年または1年とし、開始日を1月1日に限らず任意に定めることができる。



3 簿記一巡の手続き

一定期間の経営成績と一定期日の財政状態を明らかにするためには、組織立った帳簿の記入が必要となり、この簿記一巡の手続きを示すと次のようになる。



第2節

一定期間の経営成績を明らかにするにはどうしたらよいか

1 経営成績

経営成績とは、一定期間の営業活動によって得た利益または損失が、どのようにして、いくら生じたかをいう。この利益または損失は、一定期間に得た収益から、その収益を得るために犠牲となった費用を差引くことによって明らかにされる。この差額を簿記では当期純利益とよび、次の算式で計算される。

$$\text{収 益} - \text{費 用} = \text{当期純利益}$$

〈収益と費用〉

収益（外部からお金が入ってくる原因）…受取手数料，受取利息，受取整髪料など

費用（外部へお金が出ていく原因）…給料，水道光熱費，消耗品費，雑費，支払手数料，支払利息など

● 範例 1 - 1 ●

大原太郎は、神田で大原理髪店を営んでいるが、ある1年間の営業状態は次のとおりであった。このときの当期純利益を算出なさい。

営業による収入

受取整髪料 合計 ¥4,000,000

営業による支出

給 料 合計 ¥1,800,000

水道光熱費（電気代，ガス代，水道代） 合計 ¥ 480,000

消耗品費（ヘヤートニック，スプレー，石鹸など） 合計 ¥ 400,000

雑 費（洗濯代など） 合計 ¥ 320,000

➔

〈収 益〉		〈当期純利益〉										
受取整髪料 ¥4,000,000	<table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="text-align: right; padding-right: 5px;">給 料 ¥1,800,000</td> <td style="padding-left: 5px;">)</td> </tr> <tr> <td style="text-align: right; padding-right: 5px;">水道光熱費 ¥ 480,000</td> <td style="padding-left: 5px;">)</td> </tr> <tr> <td style="text-align: right; padding-right: 5px;">消耗品費 ¥ 400,000</td> <td style="padding-left: 5px;">)</td> </tr> <tr> <td style="text-align: right; padding-right: 5px;">雑 費 ¥ 320,000</td> <td style="padding-left: 5px;">)</td> </tr> <tr> <td style="text-align: right; padding-right: 5px;">合 計 <u>¥3,000,000</u></td> <td style="padding-left: 5px;">)</td> </tr> </table>	給 料 ¥1,800,000)	水道光熱費 ¥ 480,000)	消耗品費 ¥ 400,000)	雑 費 ¥ 320,000)	合 計 <u>¥3,000,000</u>)	= ¥1,000,000
給 料 ¥1,800,000)											
水道光熱費 ¥ 480,000)											
消耗品費 ¥ 400,000)											
雑 費 ¥ 320,000)											
合 計 <u>¥3,000,000</u>)											

※ここで **練習問題 1 - 1** **練習問題 1 - 2** を解いて下さい。

2 損益計算書 (Profit and Loss statement : P / L)

損益計算書とは、収益と費用を対比させ、当期純利益を表示し、一定期間の経営成績を明らかにするための書類をいい、範例1-1に基づいて作成すると次のようになる。

損益計算書

大原理髪店 自平成××年1月1日		至平成××年12月31日		(単位：円)
費用の部	金額	収益の部	金額	
給料	1,800,000	受取整髪料	4,000,000	} 収益は必ず右側に記入する
水道光熱費	480,000			
消耗品費	400,000			余白線
雑費	320,000			
当期純利益	1,000,000			合計線
	4,000,000		4,000,000	締切線

費用は必ず左側に記入する

(注) 合計線、締切線、余白線および当期純利益は朱記する。

以上の関係を算式であらわすと次のようになり、これを損益計算書等式という。

$$\text{費用} + \text{当期純利益} = \text{収益}$$

また、収益に比べて費用が多ければ当期純損失が計上されるが、この場合の損益計算書は次のようになる（上記損益計算書の受取整髪料を¥2,000,000とした場合）。

損益計算書

大原理髪店 自平成××年1月1日		至平成××年12月31日		(単位：円)
費用の部	金額	収益の部	金額	
給料	1,800,000	受取整髪料	2,000,000	
水道光熱費	480,000	当期純損失	1,000,000	
消耗品費	400,000			
雑費	320,000			
	3,000,000		3,000,000	

(注) 当期純損失も朱記する。

一定期間の経営成績は、損益計算書を作成することによって明らかにされる。そこで損益計算書を作成するためには、毎日発生する収益や費用をもれなく記録しておく必要がある。

※ここで **練習問題1-3** を解いて下さい。

第3節

一定期日の財政状態を明らかにするにはどうしたらよいか

1 財政状態

財政状態とは、商売に投下された資金を、どこから、どのような条件で受入れているかという資金の調達源泉と、その資金をどのようなものに使っているのかという資金の運用状態をいう。

〈資金の調達源泉と資金の運用状態〉

資金の調達源泉（元手をどのように集めたかをいう）…負債，純資産

資金の運用状態（元手をどのように使っているかをいう）…資産

● 範例 1 - 2 ●

大原次郎は会社を退職し、独立して大原商店を開業することにした。この場合の資金の調達源泉と資金の運用状態を明らかにしなさい。

12月15日 大原次郎は、退職金のうち¥300,000をその商売に投下（元入れ）したが、資金不足のため銀行から¥200,000を借入れ、資金を¥500,000に増加させた。

➔

〈運用状態〉		〈調達源泉〉	
資 産	大原商店は 現金 ¥500,000 を所有している	他人から借入れた分 ¥200,000	負債
		自己の正味の財産分 ¥300,000	純資産

31日 大原商店は、備品を¥150,000で購入し、現金を支払った。

➔

〈運用状態〉		〈調達源泉〉	
資 産	大原商店は 現金 ¥350,000 備品 ¥150,000 を所有している	他人から借入れた分 ¥200,000	負債
		自己の正味の財産分 ¥300,000	純資産

2 資産・負債・純資産の内容

(1) 資産

- ① 企業が所有するもののうち金銭価値で評価できるもの

現金

建物（店舗，倉庫，工場など）

備品（机，椅子，戸棚，金庫，ワープロなど）

車両運搬具

土地

- ② 企業が将来外部より金銭を受取ることができる権利

貸付金（お金を貸付けた場合，後日返済してもらえる権利）

(2) 負債

企業が将来外部に金銭を支払わなければならない義務

借入金（お金を借入れた場合，後日返済しなければならない義務）

(3) 純資産

資産から負債を差引いた残額（自己の正味の財産分）

資本金

3 貸借対照表（Balance Sheet：B/S）

貸借対照表とは、資産と負債および純資産を記載し、一定期日の財政状態を明らかにするための書類をいい、範例1-2に基づいて作成すると次のようになる。

貸借対照表

大原商店		平成××年12月31日現在		(単位：円)	
資産の部		金額	負債・純資産の部		金額
資産は必ず左側に記入する	現金	350,000	借入金	200,000	負債および純資産は必ず右側に記入する
	備品	150,000	資本金	300,000	
		500,000		500,000	

以上の関係を算式であらわすと次のようになり、これを貸借対照表等式という。

$$\text{資 産} = \text{負 債} + \text{純 資 産}$$

一定期日の財政状態は、貸借対照表を作成することによって明らかにされる。そこで貸借対照表を作成するためには、毎日変動する資産や負債をもれなく記録しておく必要がある。

※ここで **練習問題1-4** **練習問題1-5** を解いて下さい。

Reference 日本における簿記の歴史

簿記（Bookkeeping：帳簿記入の略語として生じた言葉）は、13世紀ごろのヨーロッパで特に商業が盛んに行われたイタリアにおいて、金銭の貸借を業とする者が、特殊な記帳技術を考案して確立されたと考えられている。世界で最初に印刷された簿記の書物は、1494年にベニスで出版された『算術幾何比例総論』^{さんじゆつぎ か ひれいそうろん}で、これはイタリアの数学者ルカ・パチオリによって書かれたものである。この書物の「計算および記録」の章で、当時イタリアのベニスで銀行家が使用していた記帳方法が説明されている。

わが国では、江戸時代から明治、大正時代までは帳簿として「大福帳」が利用されていた。店主はこの大福帳を命の次に大切に、火事の際には焼失を恐れてまっ先に井戸に投込んだものであった。そのため長い紐をつけ、水に浸してもすぐ乾く上質の和紙でつくられていた。

しかし、産業が発展するに従って、従来の大福帳では間に合わなくなり、記録の非能率を改善する必要にせまられるようになった。そこで明治6年、ときの先覚者福沢諭吉は、アメリカの簿記教科書『コモン・スクール・ブックキーピング』という本を翻訳し、『帳合之法』^{ちやうあいのほう}という題をつけて出版した。これがはじめてわが国に紹介された洋式簿記である。

